

「妖精の輪 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

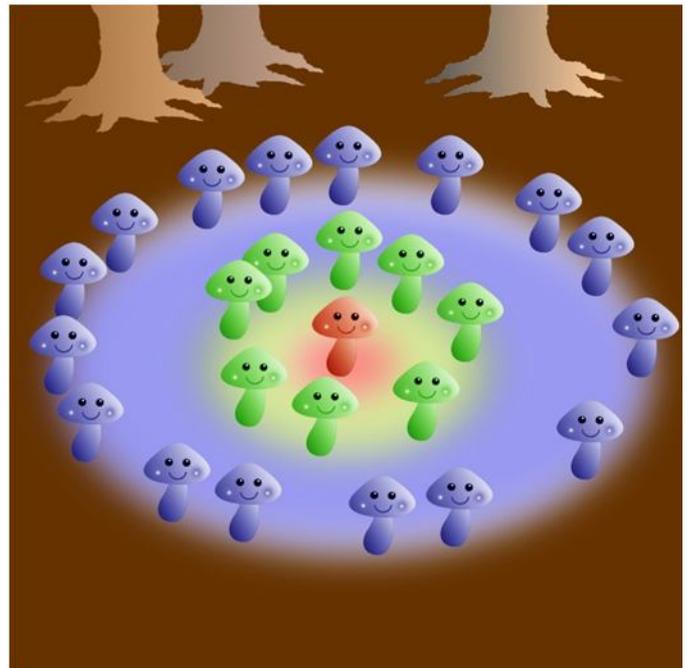
キノコというのは、菌類(菌界に属する生物)が作った、肉眼で見える大きさの、子実体のことである。「子実体(しじつたい)」とは、主として孢子を造って拡散する為の、菌類独特の器官である。実は菌の実体(菌糸)は、そのほとんどが地中(或いは樹木の中)にあり、一年中生活している。キノコは、ごく一時期(主に夏~秋)だけ、孢子を拡散させる目的で、地面の上に発生するのだ。



「タマゴタケ」 *Amanita caesareoides*

毒々しく見えるが無毒で、優秀な食用キノコ。地上に見えるのは菌体のごく一部で、地下には膨大な菌糸が存在する。菌糸ごと掘って帰れば、成長を観察できる。学名の” *caesareoides* ”は「カエサル」つまり「キノコの帝王」という意味である。(北軽井沢で撮影)

子実体(キノコ)は、菌糸が最も成長した新鮮な部位に発生しやすい。キノコの種類によっては、地中の菌体が円形(立体的に見れば地面を上面とした半球形)に成長し、その地面に接した最も外側に子実体(キノコ)を発生させるものがある。これを「菌輪」という。



「菌輪形成の模式図」

(作図 ; C. Tanaka)

図はふざけた模式図であるが、年ごとに菌体の直径が大きくなり(赤→緑→青)、その最も外側(新鮮な菌糸が集まっているところ)にキノコが輪になって発生していることを示している。実際の菌体は、地中に3次元的(上が平らな半球形)に成長している。

英語では” fairy ring ”(フェアリー・リング=妖精の輪)という、美しい名称で呼ばれる。スウェーデンでも同じように” älvdanser ”(エルヴ・ダンセル=妖精の踊り)と呼ばれている。妖精からプレゼントされた、山のごちそうという伝説もある(全部食べてはいけない)。スウェーデン北部では、Sommar solståndet(ゾンマル・ソールストンデット=夏至祭の日)に、村人全員で輪になって踊る習慣がある。

さて、菌輪はすべての種類のキノコが形成するわけではない。むしろ菌輪を形成する菌種は、稀である。

「シバフタケ」などハラタケ目(もく)のキノコに多く、多くは芝生や牧草地に見られる。しかし、森の林床(地面)には、意外にも身近なキノコが菌輪をつくることもある。その一つが「モリノカレバタケ」というキノコだ。このキノコは、北軽井沢でごく普通に見られる。きっと菌輪も見つかるはずだ。(つづく)